

(1)農業は儲からない？

“野菜工場から撤退”との記事が日経MJ紙に報じられていました。関西地方のVB（ベンチャー企業）が国内最大規模の工場を立ち上げ、レタス類を年間300万株の生産量を誇っていたが、出荷先で販売が伸び悩んでの破綻だと言います。食品スーパーや百貨店向けの販路を開拓したが、露地野菜などとの競合で消費者に浸透しきれなかった為とも云っています。

野菜工場とか植物工場と云われる生産システムも太陽光を利したものと、完全に外部遮断した上でLED光などを使ったものなど、種々な方式がみられますが、そのいずれも初期投資が大きい上に、製造から販売までの一貫した流れが確立されていなければ、事業として自立させるには厳しいものがある筈です。農業は儲からないと云われる所以も、一生懸命に野菜作りに勢を出しても、価格は基本的に需給関係に委ねられており、価格決定権を作る側＝農家が持つことが少ないからだと思います。

農業分野に魅かれる企業は多く、小売量販店や外食企業による参入は広く話題を呼んでいます。しかし、不慣れな農業に参入した企業の多くが頭を悩ませるのが、生産効率の向上と利益の確保であり、見通しの立てにくい売り方ではないでしょうか。ビジネスとしての農業はハイリスク・ローリターンから抜け出しにくい産業分野と云わざるを得ないかもしれません

今年これまでの青果物は不順な天候続きに左右されて、例年になく生産・出荷も価格形成においても乱高下が甚だしく、その度に作る側売る側ともに右往左往させられる状況が続いています。それだけに食べる側では安定した食材の流れの一つとして人工的な環境で作られた野菜たちを評価もしていますが、それが全てとは云っていません。求められるのは土を愛し、土に根差した野菜たちではないでしょうか。天然自然の環境に育まれたものが第一だと思います。

（鈴木重雄筆）